

ここからひとつの教訓「競争より共生」が得られる。生物界ではわずかな資源（食べものや光など）をめぐる競争が繰り返られていた。しかし、異なる生物種が持てる能力を出しあって共生することで、暗黒で猛毒ガスが充満する過酷な環境において大繁栄することができるといふ実例がまさにチューブワームなのである。しかし、言うは易く行うは難し。こんな見事な共生関係はたやすく真似できないし、そもそも生物進化史でも稀有なのである。

微生物が細胞内に侵入して居座って共生関係を築き上げる。こんなことは過去に二回しか起きなかった。時代ははつきりしないが十億年から二

十億年前と推定されている。一回目は「酸素呼吸」する微生物が侵入して居座った。今では「ミトコンドリア」として私たち人間の細胞の一部みたいな顔をしているが元々は外来生物だ。これにより私たちの体をつくる「動物細胞」が生まれた。二回目は動物細胞に「光合成」する微生物が入り込んで今でいうような「葉緑体」になり、「植物細胞」が生まれた。植物は動物から派生したのである。これは「突然変異と自然淘汰」によるダーウィン進化とは別次元の進化——共生進化——である。

で、私たちは目撃していることになる。過去二回しかなかった共生進化はそれぞれ動物と植物を生んだ。三回目ではどんな新生物が誕生するのだろうか。そして、それを見ている私たち自身もまた進化すべきであろう。自然の成り行きではなく、共生進化の秘密を知った人間自身の意志による新・共生進化を目指して。

### 将軍になったフジタ

野見山 眺治

(画家)

いたが、とてもそんな沙汰ではなくなってきた。藤田嗣治の（アッツ島玉砕）の絵を見た。それまでに発表された戦争画の、勇ましいラッパの音も、進軍の足音の一切も、この絵から掻き消されている。フジタがこの絵を描きあげた日、邸内にいる人たちが絵の前に集って線香をあげた。一瞬、山崎部隊長以下兵士たちが、にっこり笑った。そんな記事が写真入りで新聞に出ていた。

わざわざ新聞記者やカメラマンを呼んで、芝居がかったなどほくは、フジタ邸に住み込んで助手を務めている女友だちに、後日、憎まれ口をたたいた。

わざわざ呼ばなくても、邸内には軍の報道関係、モデルになる兵隊、いろんな人がいつも詰めているとか。あれは本当です、と彼女は真顔になった。集った皆さん、一瞬、死者の顔が動いたのを感じたという。

そうかもしれない。後年、この巨匠と親しく接するようになったが、何ごに依らず、気に入ると、すぐにも、のめり込むと言うか、そのものに乗って移って、周囲の人を、すっぱりと巻き込んでしまふ。

戦争が、あれほど死臭の漂うものとは思わなかったが、しかし生きて還ることはなからうと、入隊する日を間近にひかえた頃は、小さい震えが止まらなかった。やがて出征することにな

り、ぼくはフジタ邸にいる彼女に、さよならを言いに行った。気軽に訪ねたつもりだったが、フジタはわざわざ御馳走

### 水響く

天辺のつぎの木樞に触れて風  
さざなみを鎮めてゆきぬ秋日傘  
秋水の影流れ込む水路あり  
対岸の近きつくつくほうしかな  
犬蓼の花の葎や水響く  
この道の露草としてせせらぎぬ  
去りゆける明るさの秋日傘かな

阪西 敦子

をつくらせ、食後アトリエに招いて、自ら果物の皮を剥いて皿に盛り、それからぼくに向い、お国のために戦って下さい、とふかぶかと頭をさげ

た。向い合っている若僧は、国の尊い御盾だったのだ。上野の美術館に飾られていた（アッツ島玉砕）の前で、手を合わせている観客のひとりひとりに、軍人と同じような服装で身を固めた巨匠は、丁寧に礼を返していた。あのとき画家自身は、英霊になりかわっていたはずだ。

それ以後、次々に発表されるフジタの作品は、密林の中に追いつめられた日本兵が自決しようとする場面、あるいは逃げ場を失くした日本の婦女子が、断崖から命を投げ出す情景だったりする。不思議でならん。ぼくが接したフジタは、天皇の民としての誇りで生きている人だった。今、ぼくたちの前に並ぶ大画面は、敵も味方もない。ただ殺し合う、この世ならぬ恐ろしさだ。

日夜を分かつアトリエに籠って、フジタは戦争画の大作を次々に制作した。おそらくはルーブル美術館の壁を飾る歴史的な画家の勲章を、自分の胸に付けたに違いない。戦争がおわると、フジタは邸内の壕に入れていた、それら数枚の戦争画をすべて、ア

トリエに運び込まれた。先生、どうするのですか、と助手が尋ねると、これからは世界中の人に見せることになるので、横文字のサインにしながらは、と藤田嗣治の署名を、さっさと消したという。

後年、パリでフジタさんが備い入れた車の運転手は、かつての大戦中、ドゴール將軍の運転を任されていた兵卒だった。この男は、閣下に接するのと同じ態度というか、そのままを演じてみせる。

フジタさんは御満悦だった。なんとも無邪気な巨匠。そう思わなければ、フジタという人が分からなくなる。あの子供みたいな笑顔だけを、ぼくは信じている。

## ハーフで

いいじゃない

宮本エリアナ

(ミス・ユニバース日本代表)

周囲との違いを感じるようになったのは幼稚園のころ。

新しく友達ができると、必ず「どこから来たの?」と聞かれたものです。日本で生まれて、みんなと同じように日本語で話しているのに――。

私は、アフリカ系アメリカ人の父親と日本人の母親のもと、長崎県の佐世保で生まれました。いわゆるハーフ

です。佐世保は、通りを在日米軍の軍人が闊歩して、公園には英語の標識が掲げられ、九州にあってはグローバルな

街です。とはいえ、日本人とアメリカ人の生活エリアは分かれていたため、日本人として暮らす私は目立っていたのでしよう。

今年の三月十二日、私は長崎県代表として臨んだ「ミス・ユニバース」日本大会にて、日本代表に選ばれました。最終審査に先立って行われた約二週間にわたる合宿「ビューティ・キャンプ」では、ダンスやウォーキングなどのトレーニングを受けました。

反響は想像以上で、世界中のメディアから取材が殺到しました。

一方で、こちらはある程度予期していたとはいえ、インターネット上では「日本代表にふさわしくない」「なんで

ブラックが選ばれたんだ」とバッシングの嵐となったのです。改めて自分のアイデンティティと向き合う機会となりました。

私が尊敬する「歌姫」マライア・キャリーさんは、ブラックとホワイトの両親を持つミックスでした。幼少時代には「おまえは白人なのか、黒人なのか」と差別を受けていたといいます。それでも、マライアさんは「どちらでもない。私は私よ」と意に介さなかった。

子どものころ、私は自分のことを好きになれませんでした。肌は黒いし、ハーフであることはコンプレックスでしかなかった。

大きな転機となったのは、